

# 高等学校におけるユニバーサルデザインに基づく授業づくり

高知大学大学院総合人間自然科学研究科教育学専攻特別支援教育コース 寺田研究室  
高知県立須崎工業高等学校 教諭 村田 絵吏

## 1 はじめに

高等学校において、特別支援教育に対する理解及び推進、体制整備の充実、生徒の実態に応じた指導方法・支援体制の確立の重要性が認識され、徐々に進みつつある。通級教室のような個別指導が一般的でない高等学校では、一斉授業での工夫が必要である。海津ら(2008)<sup>1)</sup>は、発達障害等のある生徒や学習につまずきのある生徒を含めた指導方法として、多層指導モデル (Multilayer Instruction Model : MIM) の開発を行った。これは、通常学級における学習のつまずきへの早期支援及び予防的支援を中心に据え、(中略)対象となる子どもに対し、重点的に配慮は行うが、形式的には、すべての子どもが参加する(できる)ことがわが国や学校の状況に合っているという考えに基づいた指導方法である。

## 2 研究目的

本研究の目的は、高等学校の現状を考慮して、MIM(海津ら, 2008)の1stステージ・2ndステージに焦点をあてた誰もが分かるユニバーサルデザインに基づく授業づくりを実践し、検証することである。

## 3 研究内容

### (1) 方法

#### ア A高校の概要・対象クラス・対象教科

A高校は、英語・数学・国語の主要3教科では習熟度別クラスを編成し、必要に応じて学び直しの学習内容を取り入れた授業を行っている。また、放課後を活用した基礎的・基本的な学力を定着させるための加力補習、長期休業中の補習、放課後等の個別指導など、進級・卒業・進路を見据え基本的な学力定着と社会人基礎力を身に付けさせる取り組みを行っている。

数年前より校内生徒支援委員会を組織し、教員間で情報を共有できる体制がある。そして、新入生が円滑に高校生活を送ることができるよう、全入学者の出身中学校へ出向き、聞き取り調査を行い、その内容を年度初めに全教職員で周知している。生徒の実態を把握し適切な支援を行う手段の1つとして、学校環境適応感尺度『ASSESS』や進路マップ『基礎力診断テスト』(Benesse)等を行い、結果を校内研修において分析し、指導や支援に活かしている。

対象クラスは2年生Bクラスである。生徒は、将来の進路目標がすでに決まり学習意欲が高い生徒、生徒会活動や部活動、資格取得に努力している生徒が多い。一方で、授業中に落ち着きがない生徒、学習への取り組みが消極的な生徒、義務教育段階の学習内容が定着していない生徒等もあり、クラス内での学力差も比較的大きい。クラス全体の雰囲気は、活発的で学校行事にも積極的な姿勢で臨むクラスである。授業では、教員の質問や発問に臆することなく発表や発言ができるため、教員と生徒、あるいは生徒同士が関わり合う授業ができるクラスである。なかには、教員の指示が聞けていない生徒や学習内容が理解できていないため、個で学習する場面で活動が止まる生徒もいる。

対象教科は専門科目で、数学的思考力が問われ、抽象的な概念や理論を理解する力が必要な2単位の教科である。一斉授業で行われるため、学習につまずきのある生徒はもとより理解が早い生徒にも配慮が必要である。定期考査では計算問題が主となるため、義務教育段階の基本的な数学力が定着していない生徒は、苦手な教科の1つとなる。

## イ 授業の工夫

### (7) 環境の工夫…落ち着いて学習に取り組める環境を整える

対象クラスの教室環境は、黒板周辺が煩雑な状態ではないが、クラス目標や校時表、行事予定表などの掲示物が貼られた状態であった。そこで、生徒が授業や黒板に集中できるよう、教室前面の黒板周辺を整理した。また、1時間の授業の流れを時間や学習内容の構造化を中心として、場の構造化を図った。

### (4) 情報伝達の工夫…みんなに伝わるように伝え方を工夫する

1時間の目標や授業の流れが分かるよう、また黒板1枚で授業内容が収まるようパターン化し、板書を写すことに時間がかかる生徒もいたため、板書内容を精査した。また、板書をする時間、説明を聞く時間などそれぞれの学習活動の時間を設定した。そして、伝達事項や指示を視覚的に理解できる手段をとり、なおかつ心配な生徒に対しては全体に視覚的・聴覚的に指示を出した後、聞き漏らしやすい生徒を中心に復唱させたり、個別に指導するなど指示の確認を行った。授業内での机間指導は、生徒がつまづいている点を確認しヒントを与えたり、注意を促したり、取り組み内容を褒めるなどができる重要な個別指導の時間である。教員が気になる生徒だけでなく、クラス全体の進捗や教員が出した指示が的確であったのか生徒の反応でよく分かるため、授業中の机間指導は有効であった。

### (9) 活動内容の工夫…一人一人が意欲的に取り組み、関わり合えるようにする

高等学校は、授業時数に制限があることや教科目標や生徒の進路目標を達成するために、講義形式の授業が多い。

介入した授業では、まず1時間の学習活動の見通しを持たせ、授業の目標を視覚化した。また、生徒に身近な具体物の使用、パワーポイント（以下、PPT）を中心とするICTの活用、グループ学習など生徒同士が関わり合いを持てる活動を取り入れ、生徒の理解が深まるよう多様な学習活動を取り入れた。そして、課題の一つであった計算問題で学習活動が止まる生徒に焦点をあて、全ての生徒が解けるように問題の解き方を手順化した。数学的な思考が苦手な生徒は、立式のみでは理論や理屈を理解することが難しい。そこで、解き方や解く順番を簡潔な言葉で視覚的に表し、その手順に従えば必ず解けるように示した。実際の授業では、これまで取り組みが鈍かった生徒が「この解き方ならできるかもしれない」と取り組み、回収したワークシートにもそれが表れた。授業者にとっても、想像以上の成果を実感したようで、これ以後他の学年でも課題を手順化し指導されていた。また、ワークシートを用いた授業では、復習内容や既習事項でつまづいている生徒への手立てとして、使用頻度が高い公式や図を表示し、理解の早い生徒に対しては、新たな課題を設定し、生徒の活動が止まらないよう工夫を入れた。課題の設定についても見直し、学習した内容を授業内に活用できる練習問題を2~3題用意した。クラス全体には「1題だけ解く」ことを課題とし、理解が早い生徒に対しては新たな課題を設定した。

### (5) 教材・教具の工夫…みんなが興味・関心をもって分かり合えるようにする

教材・教具については、高等学校においてもワークシートや具体物、写真や資料等視聴覚教材を活用する教員が多いが、習熟度にあわせた数種類のプリント、生徒の手元にヒントカード等を置くことは一般的にはない。今回は、MIMモデルの1st・2ndステージを焦点としているため、一斉授業で全員に効果的な教材・教具の工夫を目指した。

具体物の使用については、抽象的な概念を理解しやすく、想像力を高めることができるような具体物を作成し、多忙な現場教員の負担にならない具体物を作成した。準備時間は約1時間以内で作成でき、段ボールや粘土、金属など学校内ですぐに準備できるものを材料とした。例えば、斜面を物体が動く際に生じる力や摩擦を考える授業では段ボールを使用し、物体が平面上で動く場合と斜面上で動く場合の動き方を生徒に想像させた後、実演し、解説を示したPPTと連動させた。教材・教具の工夫について

は、グループ学習やICTも活用したが、詳細は後述することとする。

#### (オ) 評価の工夫…子ども一人一人の力を出し切ることができるようにする

高等学校において、一般的に生徒が視覚的に分かる評価物として定期考査、小テスト、ノート、レポート等が挙げられるが、いずれも授業内に生徒全員を評価することは難しい。そのため、即時評価になりにくい側面がある。しかし、評価は提出物等のような視覚的に分かる評価だけでなく、授業内での適切な発言や望ましい態度に対する声かけやアイコンタクトなども含まれ、全体指導及び机間指導の場面で可能な評価方法である。

授業実践では、ワークシートの評価や多様な学習活動を通して、一斉授業や机間指導で即時評価を行った。対象授業は、教科の特性や授業者の考え方もあり、ワークシートを活用する場面が少なかったが、問題の解き方を手順化した際の授業で、生徒の成果を図るためにワークシートを作成し、採点・評価を行った。授業者は、これまでも定期考査の際に正誤の評価だけでなく途中式や立式に対し、生徒に評価が分かるサインやコメントを書き込んでいた。今回のワークシートにも同様の評価をしてもらい、生徒に評価が分かるよう示した。また、机間指導については、介入前も生徒との関わりの中で、賞賛や注意を行っていた。授業実践では、多様な学習活動を取り入れたことで、必然的に机間指導で生徒と関わる時間が多くなり、生徒から望ましい言動が出た際には、声かけなどで即時評価する場面がいつも以上に多くなった。さらに、学習の定着状態やつまずきをより詳細に把握でき、結果的に次の授業計画への具体的な手立てとなった。

#### (カ) グループ学習

当初は、グループ学習を中心に据えた授業を行ったため、活動が順調なグループとそうではないグループとの間に活動の差が出たり、生徒のつまずきを想定し授業計画を立てたが、想定範囲外で生徒がつまずきを見せた。それにより、授業目標が達成できず、結果的には講義形式の授業より進度が遅くなる点が課題となり、授業内でのグループ学習の位置づけと課題の示し方、学習内容自体と時間設定を中心に改善の必要が生じた。そこで、生徒に学んでほしいことを精選し、グループ学習を中心に据える授業ではなく、単元の目標や授業内容に応じたグループ学習を設定する手段の一部とした。また、生徒が円滑な学習活動ができるよう、グループ学習の課題や指示をワークシートに示した。例えば、ワークシートの1問目は個で考えさせる内容を設定したが、学習につまずきをみせる生徒を想定し解答に選択肢を設けた。なお、選択肢の内容は、生徒が主観的に選択できるものとし、消極的な態度を示す生徒も活躍できる工夫を入れた。また、全体への発表が不安な生徒への支援として、発表のモデルをワークシートに示し、使用するかしらないかは生徒の判断に任せた。活動が進んでないグループについては、教員が机間指導で生徒同士を繋ぐ役割を果たすようにした。

#### (キ) ICTの活用

ICTの活用については、7回の授業実践すべてに取り入れた。授業前に、授業者と筆者がパソコンやプロジェクター等必要な器具を準備し、教室にセッティングした。介入当初の授業は、授業全体でICTを使用した。教室内のスクリーンも良質ではないため、PPTを使用するたびに教室内の照明を教員が点灯・消灯を繰り返さなければならず、教員の教室内の移動が目立つ授業になったことが課題となった。

そこで、授業内容に応じてポイントを絞ったICTの活用を目指した。例えば、前時に学んだ公式が必要である練習問題を解く場面では、生徒のヒントの役割としてスライドを掲示し、必要な時にすぐに見て確認できるようにした。またスライド自体も、理論など考え方を理解させたい授業では、イメージしやすいようアニメーションや動画を用いた(図1)。他には、具体物と連動させたスライド、教室の照明に配慮し、生徒に身近なものから学習内容がイメージしやすいスライド(図2)などを作成した。

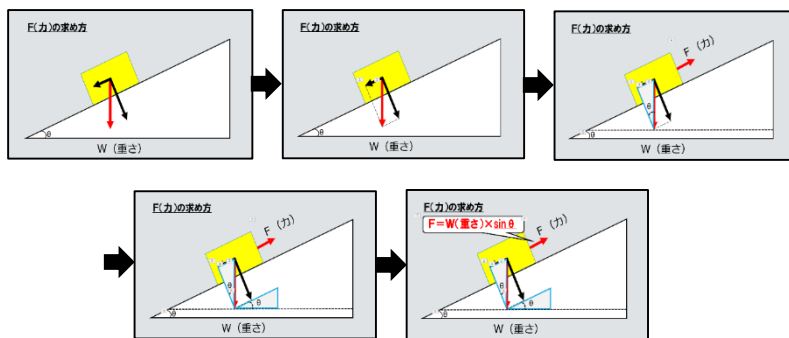


図1 アニメーションを取り入れたスライド



図2 身近な具体物からイメージしやすい具体物を表したスライド

### ウ 手続き

まず1学期に対象クラス及び対象教科について実態把握を行った。その実態より、2学期にユニバーサルデザインに基づいた授業実践を7回行い、1学期及び2学期の定期考査平均点と授業評価アンケート結果を比較するものとした。授業実践については、高知県教育委員会が作成した『すべての子どもが「わかる」「できる」授業づくりガイドブック』<sup>2)</sup>を参考とし、筆者が授業のユニバーサルデザインのポイントを提案し、授業者と授業案について検討・協議をし、授業者が授業実践を行うものとした。期間は、10月~11月に7回行った。なお、授業に必要なPPT資料やワークシート等の教材・教具は、基本的に筆者が作成し、授業者と修正・改善を重ね、授業後に協議することを繰り返した。

授業評価アンケートは、対象クラス・授業者・授業観察者（A 高校管理職2名・高知県教育委員会指導主事1名・大学院派遣高等学校現職教員2名・筆者）に対して、6月と11月に授業評価アンケートを実施し、その集計結果を統計で分析するものとした。授業評価アンケートは、東京都日野市による『通常学級での特別支援教育のスタンダード 自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方』<sup>3)</sup>による授業評価に関するアンケートと高知県教育委員会が作成した授業評価アンケートをもとに、高知大学で改変した。

### エ 統計

統計は、js-STAR 2012 (2.0.6j) を使用した。

## (2) 結果

### ア 定期考査

#### (ア) 1学期定期考査平均点と2学期定期考査平均点の分布

ユニバーサルデザインに基づいた授業の評価の1つとして、1学期の定期考査平均点と2学期の定期考査平均点を比較した(図3)。対象教科におけるクラス全体の1学期定期考査平均点は約47.9点で、2学期定期考査平均点は約55.7点で7.8点の平均点の上昇が見られた。度数ごとの人数分布では、2学期定期考査平均点が0点から29点の者が見られなくなり、成績下位層の生徒の平均点が上昇した。また2学期定期考査平均点が90点以上の者が6名増えたことが分かる。1学期定期考査平均点と2学期定期考査平均点の成績をクラ

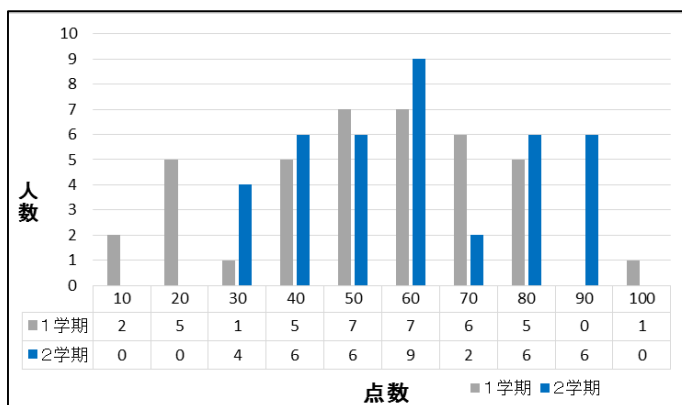


図3 1学期及び2学期定期考査平均点の分布

スタ分析（ウォード法）で5クラスタに分類し、その相関を表した（図4）。

a グループは、1学期定期検査平均点が30点以上で、2学期定期検査平均点が1学期と比べ5点以上上昇した者である。b グループは、1学期定期検査平均点が20点未満で、2学期定期検査平均点が1学期と比べ10点以上上昇した者である。c グループは、1学期定期検査平均点が55点以上で、2学期定期検査平均点に上昇が見られた者、1学期及び2学期の定期検査平均点が90点以上の者である。d グループは、1学期定期検査平均点より2学期定期検査平均点が20点以上下降した者である。e グループは、1学期定期検査平均点と2学期定期検査平均点の差が、-15点以上+5点未満の者である。

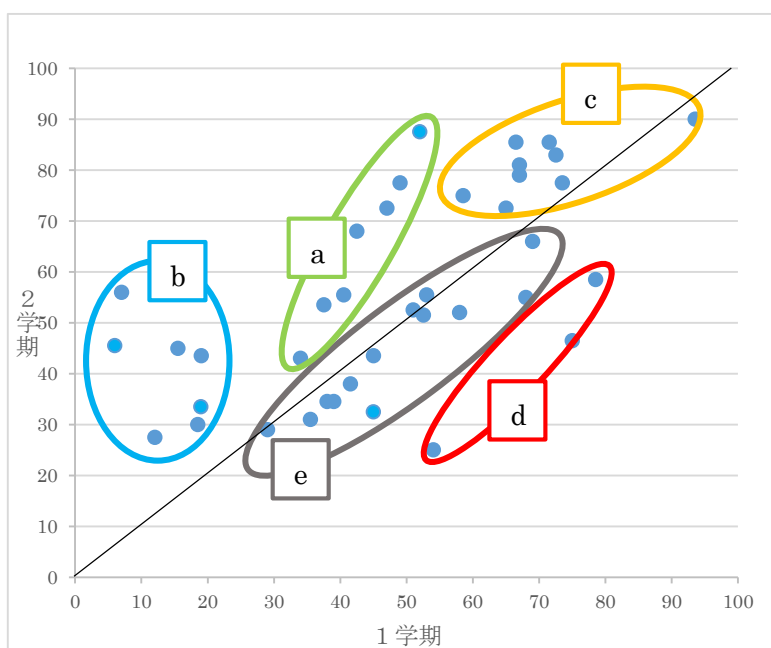


図4 1学期定期検査平均と2学期定期検査平均との相関

#### (イ) t検定

1学期定期検査平均点と2学期定期検査平均点を、t検定にかけた。t検定の結果、『1学期定期検査平均点』より『2学期定期検査平均点』の方が有意に高かった（ $t=-2.88$ ,  $df=38$ ,  $p$ 値=0.0073,  $power=0.788$ ）。

#### イ 授業評価アンケート

##### (ア) 生徒

生徒対象の授業評価アンケートは、10項目ある。その中でも、アンケート結果に特に変容が表れた以下の3項目を統計にかけた。「6.色々な学習活動を取り入れ、友達と意見や考えを聞き合えるようにしてくれる。」の項目について、カイ二乗検定の結果、有意であった（ $\chi^2=60.76$ ,  $p=0$ ,  $effect\ size\ w=1.281$ ,  $power=1$ ）。また「9.ノートやプリントにハンコやコメントなどを用いて学習に対する評価をしてくれる。」の項目についても、カイ二乗検定の結果、有意だった（ $\chi^2=161.5$ ,  $p=0$ ,  $effect\ size\ w=2.089$ ,  $power=1$ ）。そして「10.個別に褒めてくれたり、声をかけてくれたりする。」の項目においても、カイ二乗検定の結果、有意だった（ $\chi^2=25.13$ ,  $p=0$ ,  $effect\ size\ w=0.8241$ ,  $power=0.9897$ ）。

##### (イ) 授業観察者

授業観察者による授業評価アンケートについて、全ての項目で評価が上った。特に「6.ペア学習、グループ学習を取り入れるなど、児童生徒が関わり合い、学び合い、教え合う場面を設定している。」及び「8. ICTの活用など、学習内容が理解される工夫をする」の項目で、全員が高い評価であった。

##### (ウ) 授業者

授業者に行った「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」を比較すると、20項目中13項目が「常に意識している」・「少し意識している」に評価が高くなった。他7項目は、1回目のアンケート実施の際に、元々評価が高かった項目である。

#### 4 まとめ

##### (1) ユニバーサルデザイン化した授業がもたらした学力の変化

1学期の定期考査平均点と2学期の定期考査平均点の比較・分析を各グループについて考察した。クラス全体のうち25名の生徒が、1学期と2学期を比較すると定期考査の平均点が上昇していた。2学期の定期考査は、1学期と比較すると学習範囲が複数の単元をまたぎ、公式など学習内容を整理して身に付けなければならない、難易度が高くなったことが特徴的であった。

2学期に行ったユニバーサルデザインに基づいた授業は、成績が下位層の生徒だけではなく、中間層や上位層においても有効であることが定期考査結果によって分かった。成績下位層及び中間層の生徒のなかには、定期考査平均点が35点以上上昇した者も複数いた。これらのグループに共通するのは、向上心を持ち、多様な学習活動への取り組みも積極的であった。また、定期考査前の補習への参加、1学期末に生徒の状態を考慮した座席の配置によって、落ち着いて学習に臨むことができた生徒が多かったことも考えられる。多様な学習活動の中でも、成績下位層及び中間層の生徒には、問題の解き方を手順化したこと、ワークシートの課題を少なくしたことが効果的に働いたと考える。また、成績上位層は、特にグループ学習で生徒同士が関わり合い課題を解決し、生徒同士で学習の成果を発揮できたことが理由として考えられる。

定期考査平均点に大きな差がなかったグループについては、2学期定期考査範囲の学習内容の難易度が高かったことが定期考査平均点の上昇につながらなかった一因として考えられる。そして、1学期定期考査平均点より2学期定期考査平均点が大幅に下降したグループについては、定期考査前の補習への不参加、グループ学習が生徒にとって学習の場として働かなかったことが考えられる。この2つの層に共通した課題は、複数の単元の学習内容が整理して身に付いていないこと、そのために単位の換算間違いなどのイージーミスが生じたことである。これらの生徒への今後の指導として、単元ごとに学習内容を整理する時間を設けることや授業で学習内容を活用する場面をこれまで以上に設定すること、日常的に単位の換算など細かい注意点を意識させる指導の工夫が必要である。

##### (2) ユニバーサルデザイン化した授業の課題

ユニバーサルデザインのポイントを取り入れ、構造化された授業内容や学習環境、視覚的な指示や教材・教具の示し方、多様な学習活動を取り入れた授業実践は、授業自体に緩急ができ、生徒が主体的に参加できる授業となった。発達障害や学習のつまずきの有無に関わらず生徒全員を対象とし、誰もが分かる、できることを目的として授業方法であることから、幅広い学力層の生徒に効果的である。そのなかでも今回の実践を通して、次の2点を今後の課題として挙げる。

まずグループ学習についてである。生徒同士が関わり合い学び合う学習活動として有効で、学びが深まりやすい。しかし、グループ学習は生徒が主体で学習活動が進むため、生徒の実態把握が何よりも重要である。実態に応じた課題の設定でなければ、グループ学習はもとより授業そのものが成立しない可能性が高い。授業を通して、生徒に具体的な活動内容の指示、時間の設定、教員によるヒントの与え方や机間指導内で学習状況を把握した上での言葉がけなどの支援が、グループ学習の成果に大きな影響を与えることが分かった。また、生徒同士が関わり合い学び合う学習をさせるためには、教員のスキルの向上が必要で、教員同士がこの実践経験を積み、そのスキルを共有する機会を設けることが大切である。

次にICTの活用についてである。ICTは、生徒に学習内容を視覚的にとらえることができるため、生徒の理解が深まることは周知の事実である。しかし、活用の差が生じる要因は、学校現場で器材に限りがあること、器材自体が使いやすい状態で保管されていないこと等ハード面に起因するものもある。教科担任制をとる高等学校では、休み時間の10分間に器材を設置あるいは撤収する必要があるため、連続して授業がある教員は負担感を感じる。これらが、ICTが広く活用されにくい要因の一つと考えられる。ICTを広く活用する授業をするためには、授業を行う教員が身軽に準備でき、パソコンやプロジェ

クタ等の器材が既にセッティングされた教室などの環境整備が不可欠である。また、ハード面の環境整備だけでなく、教員のスキル向上も同様に大切である。現場の教員は、外部での研修に参加が難しい場合もあるため、校内研修を利用するなどして参加しやすい場面を設定し、授業での活用方法や具体的な実践例を紹介するなど充実した内容も望まれる。

### (3) おわりに

今回のユニバーサルデザインに基づいた授業実践では、MIM(海津ら, 2008)の1stと2ndステージの生徒に焦点を当てた授業づくりが、高等学校の実態に合っており、学習につまずきのある生徒だけでなく、理解の早い生徒や中間層の生徒にも有効であった。

現場の教員は、日々学習につまずきのある生徒を考慮して、学び直しを含めた授業内容、ワークシート等の活用など様々な支援を行っている。その一つ一つの支援・指導方法がユニバーサルデザインの視点に基づくものであるが、ユニバーサルポイントを共通の視点で指導法として共有すると、より効果的で具体的な手法となる。例えば、今回の授業実践でも生徒が分かる提示の仕方であれば、何をしていたのか分からないために活動が止まったり、私語をするなどの生徒の不適切な行動が減ることとなった。このような授業の提供により、生徒の困り感や学習に対するつまずきも減少し、生徒の自己理解が深まり、成功体験を重ねることで自己肯定感の向上に結び付き、結果的に学習意欲の向上につながるのではないかと考えた。

ユニバーサルデザイン化した授業を推進・普及していくためには、教職員にその具体的な手法や支援、指導方法を広く知る機会を設定するとともに、実際に教員が授業でその支援・指導方法が効果的だと実感できるかという点が重要であると考えられる。今回の授業実践においても、当初授業者は問題の解き方を手順化することにそれほど積極的ではなかった。それは、高等学校の教員として、必要最低限の数学力を身に付けさせたいという当然の思いからであった。しかし、結果的に生徒の学習に対する取り組みも良く、課題の成果も想像以上に得られる結果となった。授業者自身がそれを強く感じたため、以後他のクラスでは、さらに復習内容も含めた手順化を継続的に活用している。また具体物などの教材・教具についての取り組みも同様で、過度に負担がない範囲内で、生徒に身近なものを活用し理解できるものを作成している。このように、発達障害等の有無に関わらず、生徒に対する有効な手立てや支援方法等の具体的な情報の提供・共有、成功例を活かし指導に直接結びつく機会を設けることも効果的であろう。

卒業後の進路が直接社会と結びつくことが多い高等学校では、特別支援教育の考え方をもとした授業法が、キャリア教育と相反するものではないかと考えられることがある。しかし、生徒が卒業後の生活や社会で生きるための必要なスキルや手段、社会人として必要な力を身に付けさせる目標は同じである。ユニバーサルデザイン化した授業を広く進めることで、例えば生徒自身がどのように示されると理解できるかなどの自己理解のきっかけとなり、それが卒業後の社会で生きる力として身に付くのではないかと考える。今後高等学校では、卒業後の進路を見据えた系統的で継続的な特別支援教育を目指す必要がある。

### [引用文献]

- 1) 海津亜希子・田沼実敏・平木こゆみ・伊藤由美・Sharaon Vaughn. (2008). 通常学級における多層指導モデル (MIM) の効果—小学1年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じて—。教育心理学研究、2008,56、534-547.
- 2) 高知県教育委員会(2013) すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック-ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援-
- 3) 東京都日野市 公立小中学校全教師・教育委員会・小貫悟 通常学級での特別支援教育のスタンダード-自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方 東京書籍



[資料]

1)ユニバーサルデザインに基づく授業アンケート (生徒用)

## 授業アンケート (生徒用)

月 日

年 科 氏名 \_\_\_\_\_

次のことについて、あてはまる番号に○をつけてください。

( )科の授業についてのアンケート		そう思う	少し思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	思わない
1	黒板のまわりをすっきりさせ、黒板に集中できるようにしてくれる。	5	4	3	2	1
2	1時間の授業の内容を示し、今、授業しているところが分かるように示してくれる。	5	4	3	2	1
3	生徒と目を合わせたりしながら分かりやすく、指示や説明をしてくれる。	5	4	3	2	1
4	板書や絵、写真、具体物などを使って、分かりやすく教えてくれる。	5	4	3	2	1
5	早く作業や学習が終わった生徒のために、次の課題を準備するなど、することを示してくれる。	5	4	3	2	1
6	色々な学習活動を取り入れ、友達と意見や考えを聞き合えるようにしてくれる。	5	4	3	2	1
7	身近なものから学習の題材を取り入れて、生徒がイメージしやすいよう工夫してくれる。	5	4	3	2	1
8	DVDやパソコンなどの視聴覚機器を使って、学習が分かりやすくなる工夫してくれる。	5	4	3	2	1
9	ノートやプリントにハンコやコメントなどを用いて学習に対する評価をつけてくれる。	5	4	3	2	1
10	個別にほめてくれたり、声をかけてくれたりする。	5	4	3	2	1



2)ユニバーサルデザインに基づく授業アンケート (授業観察者用)

ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト ( 月 日)

(授業観察者用)

\*あてはまるところに○を記入してください。

所属 ( ) 小 ・ 中 ・ 高等 学校	て こ の あ い わ い あ い	か な り い い	し う じ や い い	う ま い あ い あ い	う ま い あ い あ い	う ま い あ い あ い
記入者 ( )						
ユニバーサルポイントⅠ 環境の工夫 ～落ち着いて遊びや学習に取り組める環境を整える～						
1. 教室の前面には一切掲示物をしない。						
2. 1時間の授業の流れを視覚的に提示し、今、授業しているところが分かるように示している。						
ユニバーサルポイントⅡ 情報伝達の工夫 ～みんなに伝わるように伝え方を工夫する～						
3. アイコンタクトを取りながら具体的で明確な指示や説明をする。						
4. 板書や絵、写真、具体物等の視覚的支援を活用する。						
ユニバーサルポイントⅢ 活動内容の工夫～一人一人が意欲的に取り組み、かかわり合えるようにする～						
5. 次の課題を事前に準備するなど、理解が早い子どもへの対応や見通しを持たせる工夫をする。						
6. ペア学習、グループ学習を取り入れるなど、児童生徒同士が関わり合い、学び合い、教え合う場を設定する。						
ユニバーサルポイントⅣ 教材・教具の工夫 ～みんなが興味・関心をもって分かり合えるようにする～						
7. 身近なものから教材を見つけるなど、子どもがイメージしやすい工夫をする。						
8. ICTの活用など、学習内容が理解しやすくなる工夫をする。						
ユニバーサルポイントⅤ 評価の工夫 ～子ども一人一人の力を出し切ることができるようにする～						
9. ○印を入れる、シールを貼る、結果をグラフ化するなどの視覚的な評価をする。						
10. 行動の直後の評価や机間指導などで個別に賞賛や注意を行う。						

3)ユニバーサルデザインに基づく授業アンケート (授業者用)

ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト ( 月 日)

( ) 小 ・ 中学校 高等学校	全く意識して いない	あまり意識し ていない	ええ ない	どちらか と い う こ と は あ り ま す	少し意識して いる	常に意識して いる
今年度担当学年 ( ) 年 記入者 ( )						
<b>ユニバーサルポイントⅠ 環境の工夫 ～落ち着いて遊びや学習に取り組める環境を整える～</b>						
1. 教室の前には一切掲示物をしない。						
2. 座席の位置は子どもの状態を考慮して教師が確認する。						
3. 1時間の授業の流れを視覚的に提示する。						
4. 授業の始めや途中に学習に必要なものが出されているか確認する。						
5. 学習姿勢や学習規律を具体的に指示する。						
<b>ユニバーサルポイントⅡ 情報伝達の工夫 ～みんなに伝わるように伝え方を工夫する～</b>						
6. アイコンタクトを取りながら具体的に明確な指示や説明をする。						
7. 板書や絵、写真、具体物等の視覚的支援を活用する。						
8. 文字の大きさや量を考慮する。						
9. 授業の流れが分かる板書にする。						
<b>ユニバーサルポイントⅢ 活動内容の工夫～一人一人が意欲的に取り組み、かかわり合えるようにする～</b>						
10. 授業の進め方にパターンを決めている。						
11. 「動」と「静」の活動を組み合わせるなど、授業にメリハリをつける。						
12. 次の課題を事前に準備するなど、理解が早い子どもへの対応や見通しを持たせる工夫をする。						
13. 具体物の操作や体験的な学習を取り入れるなど、多様な感覚を使う工夫をする。						
14. ペア学習、グループ学習を取り入れるなど、児童生徒同士が関わり合い、学び合い、教え合う場を設定する。						
<b>ユニバーサルポイントⅣ 教材・教具の工夫 ～みんなが興味・関心をもって分かり合えるようにする～</b>						
15. ワークシート等を活用する。						
16. 身近なものから教材を見つけるなど子どもがイメージしやすい工夫をする。						
17. ICTの活用など学習内容が理解しやすくなる工夫をする。						
<b>ユニバーサルポイントⅤ 評価の工夫 ～子ども一人一人の力を出し切ることができるようにする～</b>						
18. 具体的に子どもに伝わる方法で褒める。						
19. ○印を入れる、シールを貼る、結果をグラフ化する等の視覚的な評価をする。						
20. 行動の直後に評価を行う等、机間指導も活用して個別に賞賛や注意を行う。						